

菊池耕斎「本多美作守藤原忠相墓誌銘」の紹介

伊藤善隆

本稿で紹介する「本多美作守藤原忠相墓誌銘」（天和二年六月奥）は、近世前期の儒者菊池耕斎が記した、三河西端の藩祖、本多忠相の墓誌銘である。この墓誌銘は、『耕斎全集』（写本、国立公文書館内閣文庫蔵）中に「藤原忠相君墓誌銘」（『耕斎文章』巻六「雑著」所収として見えるものだが、此度その清書本と考えられる卷子本一卷（個人蔵）を調査する機会を得た。

本多忠相（慶長四年～天和二年）は、本多康俊（三河西尾藩主、のち近江膳所藩主）の次男として生まれた。西端藩の祖である。忠相は、はじめ元和二年に三河碧海郡に千石の采地を賜り、晩年には、上総、下総、武蔵などの領地を合わせて八千石の旗本となった。子の忠將の代の天和二年四月には九千石に増えられている。西端に陣屋があったが、幕末の元治元年（一八六四）に万石の列に加えられたことにより西端藩が成立。短い期間ではあったが、明治四年（一八七二）の廃藩まで存続した。

菊池耕斎は、元和四年八月に京都で生まれ、天和二年十二月に六十五歳で江戸に没した。儒業を林羅山、菅玄同に受け、医業を野間玄琢に学んだ。耕斎は、久留米藩儒、また鹿兒島藩賓師として一般に知られているが、本多家とも深い関係があった。

『先哲叢談』続編の巻之二に収録されたその伝によれば、耕斎は肥後の名族菊池氏の末裔。耕斎の曾祖父七兵衛武宗は、天文年間に自分の出自を隠して相模川の西の村に寓居していたが、それを小田原城主北条氏康が知り、賓客として招いた。武宗の子の武茂は、小

田原城陥落の後、北条氏直が高野山で没するに及び、その孤児を保護し、密かに京都で北条の遺臣に託したという。その後、武茂は嵯峨に寓居し、そこで生まれたのが耕斎の父、武方である。武方は儒医となって元春と称した。仕官を望んで三河の西尾、伊勢の亀山などを遊歴し、いずれからも賓礼をもって遇されたという。

『先哲叢談』に明確には記されていないが、耕斎の三男武雄（号半隠）による「先考耕斎先生略伝」（『耕斎全集』所収）に拠れば、元春は本多俊次（忠相の兄、康俊の子）に仕え、西尾、亀山、膳所などの県を経て儒学を教授したとある。俊次は、元和七年に三河西尾城主、寛永十三年に伊勢亀山城主、慶安四年に近江膳所城主となっている。元春と俊次の関係が何時どのように始まったものかは不明ながら、少なくとも耕斎にとって本多家との関係は父の代からの浅からぬものであったということになる。また、『先哲叢談』によれば、明暦元年の冬、朝鮮通信使が京都に逗留した際、宿所とされた本國寺の館伴使を務めた俊次は、耕斎に文翰の事を委ねたという（このことは「先考耕斎先生略伝」にも記述がある）。

こうした両者の深い関係を裏付けるように、『耕斎全集』を繙けば、「本多忠相君墓誌銘」に続いて「故西尾亀山膳所等城主従五位下本多下総守藤原俊次君墓誌銘」が収録されている。さらに『耕斎全集』からは、他にも「陪本多兵部侍郎君（康將）賞後園牡丹」、「本多作州太守（忠相）酒器詩」や「本多尚衣奉御康長公挽詩之序」、「作八景図納浅間神祠文 代本多備使君（忠將）」など、本多家との関係の密接さを示す詩文を拾うことができるのである。

さて、本巻は、従来から知られている本多忠相の伝記的事実に対し、新たに付加すべき内容を持っているわけではない。しかし、『耕斎全集』所収本文にない巻末の年記を確認することができる。また、本巻は、虫損を補修して改装されているものの、当時制作さ

れた共箱と考へ得る漆塗の箱に納められており、その箱の蓋の裏には、「孝子備前守忠将納之」と金泥で書かれている。とすれば、俄に断定はできないものの、本巻は供養のために菩提寺に納められた正式な原本であり、その筆跡は耕齋自身のものである可能性が高い。すなわち、簡単ではあるが、数葉の図版とともに、ここで翻刻紹介する所以である。

縫殿助康俊母萱沼織部正定盈女以慶長己亥秋七月生于下総小篠韮達大度明敏有才七歳初来于江府十一歳奉拜
東照宮十五歳奉拜
台徳公十七歳仕于
台徳公幕下為扈從初賜千石田後復加賜五百石陞為近習美元和乙卯歳也是歳夏

〈書誌〉

形態……卷子本一卷。改装（虫損補修）。

大きさ……縦三一・〇糎×長さ二米六八糎（本紙は、縦一九・〇×長さ二

米四六糎）。

表紙……布表紙（改装か、茶色草花模様を織り出す）。

見返し……白紙（改装か）。

字高……二三・九糎（本文二行目「君本多氏……忠相父」を計測）。

備考……漆塗の箱（縦三四・二糎×横五・五糎×高さ五・〇糎）が附属す

る。蓋の表には「本多美作守藤原忠相墓誌銘」、裏には

「孝子備前守忠将納之」と金泥で書かれ、箱本体には立葵の紋の金具がついている。

〈翻刻〉

故書院隊長江戸留守

従五位下本多美作守

藤原忠相君墓誌銘

君本多氏姓藤原諱忠相父

台徳公薨奉仕
大猷公為書院隊長加賜三千石之田明曆四年転任
御城留守徙居桜田公館寛文七年丁未君以年至請解職不許至再至三皆不報君雖強視事而心不暫忘乎退休鬱結成病顔色衰颯

嚴有公矜君赤忱乃以十年
庚戌二月某日 恩許優
命別賜菟裘之攸於愛宕之
下拜謝之日仍賜温 語且
聽朔望之外隨便宜從平川
口御門入拜 御前君抑淚
而出天和二年二月廿六日
以病卒于隱処年八十四蓋
君事

台徳公二十二年

大猷公二十年

嚴有公亦如之闕 朝三世
歷年六十二年秉心立誠日
慎一日是以獲乎上信乎友
能名藉藉其為書院長也再
勤番於駿府御城一奉使於
尾州一為使于賀州其為留
守之明年 御城有火君早
入指揮得宜人稱其能其解
職之歲猶奉 命監 御私
殿營造事甚称 旨其奉職
不苟也亦可以見矣君娶稻
垣撰津守重種⁵女延宝己未
先君四年而卒生三男五女
長忠將從五位下備前守見
為書院隊長次元照曾為徒
兵隊長次重次從五位下東

市令女長滴近藤用將次堀
田一輝次武田信貞次大久
保忠時次佐久間勝豊孫男
女二十人以其月廿七日葬
于愛宕山之後円成之淨刹
已葬之後令嗣忠將君欲條
君之履歷刻石表墓備乎終
身慕焉因叙其行実而繫以
銘銘曰

行已無欺 処物惟仁

既獲乎君 夙順乎親

院長留守 兩処要津

晚請引年 賜宅城闈

朴素自奉 養痾樂貧

有子靈承 令問忠淳

身服五品 壽過八旬

生順死安 庶乎若人

⁶天和二年壬戌六月七日

孝子備前守忠將立

耕齋菊池東勺誌

〈校異〉

(1) 『耕齋全集』に「故書院隊長江戸留守從五位下本多美作守藤原忠相君墓誌銘」を「藤原忠相君墓誌銘」とする。

(2) 『耕齋全集』に「本多氏」なし。

(3) 「沼」は原本虫損により欠損。『耕齋全集』により補う。

(4) 『耕齋全集』に「君」を「居」に誤る。

- (5) 『耕斎全集』に「延」を「延」に誤る。
- (6) 『耕斎全集』に「天和二年壬戌六月七日 孝子備前守忠将立 耕斎菊池東勺誌」なし。

(付記) 本稿は平成十八年度科学研究費補助金(若手研究(B))「近世前期文学における明末文化の影響」課題番号17720038)の成果である。

〈図版〉



(図版1) 漆塗箱



(図版2) 箱を開けた様子



(図版3) 箱側面の金具

故書院隊長江城留守
從五位下本多美作守
藤原忠相君墓誌銘

君本多氏姓藤原諱忠相父
縫殿助康俊母管口織部正
定盈女以慶長己亥秋七月
生于下總小篠蠶達大度明
敏有才七歲初来于江府十
一歲奉拜

東照官十五歲奉拜

台德公十七歲仕于

台德公幕下為扈從初賜千

石田後復加賜五百石陞為

(圖版4) 卷頭

銘銘曰

行已無欺 處物惟仁
既獲乎君 夙順乎親
院長留守 兩震要津
晚請引年 賜宅城闈
朴素自奉 養疴樂貧
有子靈承 令問忠淳
身服五品 壽過八旬
生順死安 庶乎吾人

天和二年壬戌六月七日

孝子備前守忠將立

耕齋菊池東白誌

(圖版5) 卷末

The edition of “Honda Mimasakanokami Fujiwara tadasuke boshimei”

Yoshitaka ITO

We investigate the epitaph of Tadasuke Honda, “Honda Mimasakanokami Fujiwara tadasuke boshimei”. The epitaph was written by Kousai Kikuchi. Tadasuke Honda is a vassal of a shogun. And Kousai Kikuchi is a famous Confucian scholar of the Edo era. Therefore we will edit here “Honda Mimasakanokami Fujiwara Tadasuke boshimei” and introduce it.